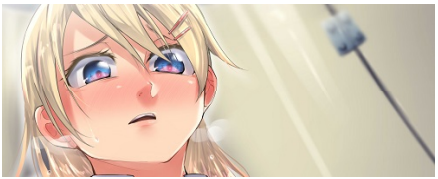
大決壊！
秘密の日記

第一章目　秘密の角オナ　P4

第二章目 教室でのおもらし！　P44

第三章目　ギャルはおむつ少女！　P69



四章目　体育でのおもらし事件！P85

五章目　ふたりのオナニー　P130

六章目　貝合わせっ！　P148

終章　おむ友なふたり　P200

むふふふ

1　一章目　秘密の角オナ

（あー、いつ見てもおっぱいでかいなー）

　朝の授業が始まる、落ち着かない雰囲気の教室。

　北見千晴（きたみ ちはる）は見入っていた。

　クラスメートの雲仙（うんぜん）レナのおっぱいに。

（E……いや、更に大きくなってFカップ……はあるか？）

　おっぱいだけではなく、レナの身体からは若さがはち切れんばかりに発散されていた。
　大きく張った胸元を開くように着こな

した制服のブラウス、むっちりとした太ももを遺憾なく剥き出しにしたミニスカート。
　それでも腰にはカーディガンを巻いて、背後からスカートのガードを固めているのは乙女心からか。

　髪の色は、目が覚めるような金髪。
　染めているのではなく、地毛。
　というのも、父方に欧米系の血が混じっていて、日本人の母とのクォーターらしい。
　瞳は、晴れ上がりの水たまりのように澄んだ碧眼。

「それでさー、この動画見てみて。猫がちょー可愛いんだって♪」

　レナは教室の後ろのほうで、女子の集団の真ん中にいて楽しそうにおしゃべりに興じている。

　レナを一言で言い表すのならば、太陽という言葉がふさわしい。
　レナがその場所にいるだけで、クラスが明るい雰囲気に包まれる。

（まさにリア充……はぁ……）

　千晴は、人知れずにため息をつく。
　一方の千晴はと言うと。
　いつも教室の自分の席で、読書をしている少女だった。

　『千晴』という男っぽい名前をしているけど、生物学的にいえば女であることは間違いない。
　それでも千晴は少年のような体つきの、小柄な少女だった。

　黒髪ロング……といえば聞こえがいいけど、実は切りに行くのが面倒臭すぎて無造作に伸び放題になっている髪の毛。

　美容室の陽キャラオーラは、千晴のような陰キャラには厳しすぎる。
　それに猫背だから、ただでさえ低い身長が更に低くみえている。
　千晴の席だけ、６月という季節もあって湿度が１０％は上がっている感じだった。

（はぁ……。せめてあんなふうにおっぱいがもうちょっと大きかったら人生変わってたかもしれないんだけどなー。あー、レナのおっぱい、いい匂いしそうだなー）

　そんなことを考えてゲンナリする。
　……ないものをねだっていても仕方がないし。

（ラノベでも読も）

　千晴はカバンから読みかけのライトノ

ベルを取り出すと、無心に視線を落としていく。
　ちょうど読み始めたシーンは、ヒロインのお色気シーンだった。

☆

「ぐぬぬ。不覚……っ」

　千晴が唸ってしまったのは、学校から帰ってきて、自分の部屋でカバンを開けたそのときだった。
　読みかけのラノベを読み進めようと思っていたのに、どうやら学校に忘れてきてしまったらしい。
　きっと机の中に入れっぱなしになっていることだろう。

（気になるところで授業が始まったから……ううっ、この読みたいという欲求を、明日まで我慢しろと……!?）

　読書家である千晴は、一日に一冊のペースで本を読む。
　暇さえあれば活字を視界に入れていなければ禁断症状が出るほどだ。

　そんな千晴が、学校に忘れて我慢できるはずがなかった。
　幸いなことに、家から学校までは歩いて１５分ほどの距離。取りに行けない距離ではない。

「取りに行くか……どっこいしょっと」

　重たい腰を上げると、千晴は放課後の学校へと急ぐのだった。
　まだ制服を着ているから、着替える面倒は省ける。

☆

　放課後の教室。
　夕焼けに包まれた教室には、誰一人としていなかった。
　てっきり女子のリア充組がおしゃべりしているかと思ったけど、もうすでに帰ったらしい。

「やっぱりここにあったか」

　千晴は自分の机のなかから目的のラノベを見つけると、さっさと帰ろうと踵を返す。
　……だが。

「あ、あれは……!!」

　千晴は我が目を疑ってしまう。
　なにしろ、レナの机の横フックにかかっているものは……！

「体操服……！」

　それはレナの体操服が入っているであろう、布製の体操袋だった。
　しかも今日は６時限目に体育の授業があったから、ほぼ脱ぎたての。
　どうやらレナは、体操服を持って帰り忘れたらしい。

（だ、誰もいない、な……？）

　ちょっとだけ、匂いを嗅ぐくらいなら……。

　千晴の脳裏で悪魔が囁きかける。
　数時間前にはレナのおっぱいと密着していたであろう体操服は、どんな芳しい香りがするのだろうか？
　いつもレナのおっぱいを見ている千晴の頭は、一瞬にしてそのことでいっぱいになっていた。

「匂いを嗅ぐだけなら……」

　別に体操服を盗もうとしているわけじゃないし。
　匂いを嗅ぐだけならセーフだろう。
　念のために、一度廊下に出て誰もいないことを確認。よし、誰もいない。
　嗅ぐならいまがチャンスだ。

「ごめんなさい。ずっと前から気になっていました……」
　この場にいないレナに謝っておく。
　千晴は体操袋を広げていくと……、

　もわ……。

　立ち昇ってきたのは、爽やかな汗の香り。
　まず視界に入ってきたのは、真っ白で厚手な体操シャツだった。
　千晴は恐る恐る、体操シャツを手に取って、広げてみる。

　シャツはしっとりと汗で湿っていて、レナの体温をまだ残しているようにも思えてくる。

「匂い……どんな匂い、するの……？」

　呟き、ゆっくりと鼻先を体操服へと近づけていき――、
　そのまま深呼吸。

「すぅぅぅぅぅ……はぁぁぁぁぁ……」

　だけど、思っていたような甘い香りはしなかった。
　その代わり、脇の下のあたりからは、ツンと悩ましい甘酸っぱいがする。
　嫌な匂いではない。
　むしろ、呼吸しているとクラクラ目眩がする感じの、フェロモンをまとった香り。

「どうしよう、物足りなくなってきてる……っ」

　千晴は体操シャツでは飽き足らず、レナの体操袋を更に漁っていく。
　といっても、あとはブルマと汗拭きタオルくらいしかないのだが。
　目的は、なんと言ってもブルマだ。
　……そう思っていたのに。

「こ、これは……!?」

　千晴は思わず目を見開いてしまう。
　なにしろ体操袋の一番奥にしまわれていたもの。
　それは――！

「ショーツ……だと!?」

　手に取ってから驚愕する。

　それはレナが穿いていたショーツなのだろう。
　白地に、水色のしましま模様が入っているボーダーショーツだった。レナらしい可愛らしいデザインだ。
　かすかに汗で湿っていて、それに漂ってきているのは……。

　もわわ……。

　汗に混じってツーンと漂ってくるのは、アンモニア系の刺激的な香りだった。
　だけどおもらしをしてしまったというわけではないのだろう。そこまで濡れているというわけでもない。

（と、言うことは……？）

　千晴の背筋を、滝のような汗が流れ落ちていく。

　ここでショーツを広げるということは、レナの恥ずかしいところを見るということでもある。

　はたして、それは許される行為なのだろうか……？
　良心が咎めるのを感じるけど、ここまできてやめてしまえば、もしかしたら一生ものの後悔になるかもしれない。
　もう、二度とこのようなチャンスはないだろうし。

「レナさんのショーツの裏側……」

　大丈夫。
　チラッと見るだけ。
　そしたら体操袋に戻して、さっさと帰ればそれでお終いにする。
　心に決めてショーツを広げていく。
　すると。

もわわ〜ん……。

「ウッ、これは……っ」

　ショーツの内側から立ち昇ってきた尿臭に、千晴はクラッときて気を失いそうになってしまう。
　あまりのおしっこ臭さに、涙が溢れ出してくるほどだ。

「これが、レナさんのショーツの裏側……」

もわ……、

　濃密な尿臭を放っているショーツの裏側は、鮮やかなレモン色に染め上げられていた。
　女の子の恥ずかしい染みを隠すための二重布は、見事なまでに黄ばんでいた。

　よく見ればクロッチの外側まで黄ばんでいる。
　よごれが分かりやすいように、白い布地になっているからこそ、余計にその黄ばみが際立ってみえた。

「これが体操袋の中に入っていたということは……体育の授業中に穿いていた？
　それとも、もっと前から？」

　それはわからない。
　だがたしかなことは、このチビッた……にしては多すぎる量のおしっこを受け止めたショーツを穿いていたということは、ブルマも相当な量のおしっこを吸収しているということだ。

「レナさんのブルマは……!?」

　千晴はショーツを畳んで体操袋の中へとしまうと、紺色のブルマを手に取る。

千晴は、ブルマが大好きだった。
それも、紺色の。
近年では絶滅したかに思われているブルマだけど、我がつぼみ学園ではいまも生き残っているのだ。
だけど自分のブルマにはいくらなんでも萌えることはできない。

「さっきまで、レナさんのお尻を包み込んでいたブルマ……。むっちりしたお尻だから、ちょっと伸びてるところが実にいい……」

ブルマを観察しながらも触診していると、手に伝わってくるのはしっとりとした湿り気。

「レナさんのブルマのなかは……？」

だめだ。

　これ以上踏み込んだら、後戻りできない……。
　頭では理解できているけど、千晴にはどうしてもやめることができなかった。
　千晴は、その湿ったブルマを、ゆっくりと広げていくと――。

　もわっ、もわわ……。

　甘酸っぱい香りと、アンモニア臭が混じり合った、なんとも言えない香りが立ち昇ってきた。
　紺色ブルマはちょっとくらいおもらししたり失敗しても分からないが……この香りは、かなりのおしっこを受け止めたのだろう。

「あ、やば」

　じゅわわっ。

　クロッチの裏側に感じるのは、生温かい感触。
　レナのブルマに興奮してきた千晴は、愛液をおもらししてしまったのだ。

「どうしよう……ぱんつ、汚しちゃう……」

　呟きながらも、千晴はブルマを鼻先に持ってきて、
　そして。

「すぅぅぅぅぅぅぅ……」

　思いっきり深呼吸していた。
　レナの恥ずかしい香りが鼻孔に満たされ、肺に染みこんでいく。

「はぁぁぁぁぁ……いい匂い……」

恍惚とした表情を浮かべ、千晴は呟く。
千晴は、重度の匂いフェチだった。
いつもレナのおっぱいを眺めながら、どんな匂いがするのか気にしているほどに。
だが今はおっぱいなんかよりも、もっと凄いブルマが手の中にある。

じゅわ、じゅわわ……。

「あっ、ぱんつ、熱くなってきちゃった……」

クロッチの裏側は早くもヌルヌルになってきている。
千晴は小柄で少年のような身体つきをしているというのに、重度の汁ッ子だった。
オナニーをするたびに、おもらししたかのようにショーツを汚してしまう。

　それでもいまは止めることができなかった。

「制服、汚さないようにしないと」

　もわわ……。

　スカートを捲り上げると、ヨーグルト系の酸っぱい蒸気が立ち昇ってくる。
　それは千晴が発情しているときに発散される、恥ずかしい匂いだ。

　露わになったのは、千晴の年頃の少女にしては、やや幼いデザインのショーツ。
　猫さんの顔の、フロントプリントのショーツだ。
　こっとん製でふかふかしているから、千晴は何枚もこのショーツを買って、いつも愛用していた。

「どうしよう。凄くエッチになっちゃってるし」

もわーん……。

　自らの股間から発散される匂いに千晴は顔をしかめてしまう。
　まさか、レナのブルマの匂いを嗅いで、こんなにも発情してしまうだなんて。
　ここでやめれば、下校するあいだに愛液のおもらしが内股を伝い落ちることになることだろう。
　黒のニーハイを穿いているとはいえ、もしかしたら誰かに見咎められてしまうかもしれない。
　それならば。

「匂いだけ……肌触りだけ……。穿かないから、うん……」

　ここでショーツやブルマ、更には体操シャツまでも着てオナニーに耽ることができたらどんなに気持ちいいことだろうか？
　そんな誘惑を振り払い、千晴は匂いと肌触りだけで我慢しておくことにする。

「レナさんのブルマ……はぁはぁ」

　クチュ、クチュ、クチュリ……。

　匂いを嗅ぎながら、ショーツの上から秘部に触れていく。
　淫靡な水音が、誰もいない放課後の教室に鳴り響く。
　だけど指先だけではすぐに我慢が効かなくなってきてしまう。

「レナさんの机の角……ううっ」

　ぐちゅっ、ぐちゅ、ぐちゅちゅっ。

　あろうことか千晴は、レナの机の角に自らの秘部をあてると、リズミカルに、荒々しく腰をグラインドさせ始めたではないか。

「んっ、あっ、あああ！　んっくぅぅぅ!!」

　クリトリスを机に押しつけての角オナ。
　それは女の子が早く絶頂に達したいときにする、あまりにも恥ずかしい行為。
　決して、他人には見られてはいけない恥ずべき行為だ。

（早くすませないと……んんっ！　誰か来ちゃうかもしれないし！）

　ぐちゅっぐちゅちゅ！
　ガタッ！　ガタンッ！

千晴の大胆な腰の振りに、レナの机が音を立てて揺れる。
その音は廊下にまで響き渡るほどだったが……、いまの千晴には聞こえていない。
それほどまでに千晴は角オナに夢中になっていた。
レナのブルマを鼻に押しつけ、おしっこの匂いを吸い込んでの自慰は、完全に千晴の理性を溶かしていた。

（ヤバ……おしっこしたくなってきちゃったし）

ゾクゾクゾク……ッ。
こみ上げてきたのは、唐突な尿意。
だけどここまできて止めるわけにもいかない。
それに角に押しつけてるから大丈夫……！

「んっ、あっ、あああ！　イッ、いきそ……！」

　尿意と絶頂感が蕩け合って、渾然一体となって襲いかかってくる。
　その快楽に抗う術など、思春期の少女は持ち合わせてはいなかった。

「うう！　くる……！　いっ、いぐ！」

　ガタン！　ガッッタン！
　重たい机の脚が軽々と持ち上がり、床に擦れて悲鳴を上げる。
　それほどまでに千晴は激しく達していた。
　自分でも、驚くほどに。

「う……そ……ッ。とまら、ない……！」

　グチュッ、グチュチュ……！

　角に押しつけられている秘部からは、ドロッとした体液が溢れ出してくる。
　ヨーグルトの上澄み液のような、ツンとした香り。

「あっ、だ、だめぇ……！」

　しゅわわ！
　しゅわわわわわわわわわ！

　激しい絶頂感に襲われて、ついには千晴は失禁してしまう。
　いままで絶頂失禁なんて、一度もしたことがなかったのに。

「うっ、ううう！　と、とまら……ないぃ……ッ」

　プシュ！　プッシャア！
　シュイイイイイイイイイイ……！

　ショーツから溢れ出してくるおしっこは、レナの机へと広がっていくと、縁からナイアガラの滝のように落ちていく。
　夕陽に、キラキラと照らされながら。

「うっぐ……！　おしっこ……ううっ、はぁぁぁぁ、ダメ……！」

　明日になったら、なにも知らないレナはこの机で勉強するのだろう。
　そしてなにも知らないレナは、洗濯をするとはいえ、千晴が欲望を発散させているブルマをなにも知らずに穿くのだろう。
　そう考えると、背徳的な快感がこみ上げてくる。

「おまた……！　蕩ける……ウッウウー！」

しゅいいいいいいいいいいいいいい……。

　夕陽に包まれる教室に、くぐもった水音が鳴り響く。
　内股を伝い落ちていくおしっこは、黒のニーハイを塗らしていき上履きに溜まっていき、それさえも溢れ出してくると床へと広がっていく。

「ふぁあああああ……。おしっこ……あったかぁい……」

　しゅわわわわわわわわわわ……。

　このあとの掃除が大変なことになろうとも。
　千晴は、刹那的な快楽を貪ろうと、切なげに角オナに耽る。
　絶頂感に身を任せ、失禁しながらも。

「はぁぁ……。気持ち……よかった……」

はぁ……、はぁ……はぁ……。

静まりかえった教室に、千晴の獣のような吐息が熱く籠もる。
教室はツーンとしたアンモニア臭に蒸れ返り、

ぽた、ぽたた……。

机の縁に溜まっているおしっこが床に落ちる音が、虚しく響き渡っていた。

「掃除、しないと……」

ガクッ、ガクン……ッ！

絶頂の残滓に、角に押しつけたままになっている腰が、無意識のうちに淫靡にグラインドする。
女の子は一度絶頂すると、すぐには元に戻ってはくれないのだ。

　もうしばらく、このままで……せめて、あと５分くらいは。
　そう思っていたときだった。

「あー、サイアク。体操服忘れてきちゃうなんて！」

　ガラガラと教室の後ろの引き戸が開かれると、教室に入ってきたのは……いま、千晴が一番会いたくない人物……、雲仙レナだった。

「あ、千晴ちゃん？」

　レナは千晴の姿を見つけるとキョトンと目を見開き、そしてイケナイことに耽っていたことをしていたのだと、ふんわりと理解したらしい。

「あははー、取り込み中だった、かな……？」

　愛想笑いを教室から浮かべて出ていこうとするも、直後にはそこが自分の席で、しかももしかしたら千晴が握り締めているブルマも自分のものだと気づいてしまったのだろう。

「ちょっ、まさかそのブルマって、あたしの!?」
「あ、あの、これは、その……！」

　言葉に詰まった千晴は必死になって言い訳を考えるも、なにか妙案が浮かんでくるはずもなくて。
　それに、絶頂したばかりでまだ意識がぼんやりしているのもあって。

「きゅうう〜〜」

　千晴は、机に突っ伏するように気を失ってしまうのだった。

☆

「まったくもう！　人のブルマを変なことに使わないのっ！」
「うう……。返す言葉もありません」

　夕闇が迫ってきた教室で、千晴はレナにお説教を受けることになっていた。
　すべてが因果応報だったから返す言葉もない。
　ただでさえ小柄な千晴は、更に身体を小さくして頭を下げるばかりだった。

　ちなみに。
　教室のお掃除は千晴が気を失っているあいだにレナが済ませてくれたのだった。更に頭が上がらない。
　そんなレナは、プンプンと怒っていたかと思うと、急にいたずらっぽい笑みを浮かべ、

「にしてもさー、千晴ちゃんって、いつもあたしのおっぱい、見てたよね」
「う……っ」

　だなんて聞いてくる。
　まさかバレていただなんて。

「き、気づいてた、の……？」
「当たり前じゃん。いつもガン見してきてるんだもん」
「だって……大きいんだもん……。いい匂いしそうだし……」
「ふーん。そんなこと考えてたんだ。千晴ちゃん……って、もう面倒だから千晴って呼ぶから！　だからあたしのこともレナって呼び捨てにして！」
「ちょっ、なんでいまの話の流れで!?」
「べっつにいいけどー？　もしも嫌だっていうんなら、ここでやってたことクラスでバラしちゃうかもしれないな～？」

「そ、それは勘弁して下さいっ。わかった、わかったから……レ、レナ……」
「それでよろしい」

　それと……、
　と、レナは頬を赤らめると、ちょっとだけ恥ずかしそうに切り出す。
　表情がコロコロ変わって、いつも仏頂面をしている千晴とは大違いだ。
　レナは頬を赤らめながら言うのだった。

「それで……、見ちゃった……よね？」
「は？」

　なにを言われているのかわからなくて、頭上に『？』マークを浮かべてしまう。
　一体なにを見ちゃったというのだろう？

　むしろ、恥ずかしいところを見られたのは千晴のような気がするけど……。
　と、そこまで考えて思い当たる。

「もしかして、ぱんつ？」
「ううー……。やっぱりしっかり見られちゃってたし……」

　レナはその場で頭を抱えてしゃがみこんでしまう。よほど恥ずかしいのか、耳まで真っ赤になっていた。
　それでもスカートからショーツが見えないように気を使っているのは女子のたしなみだろうか。

「そういえば、ちょっと黄ばんでいたけど……」
「ストップ！　もうそれ以上は言わなくてもわかってるから！　あああああ！　もうマジ最悪！　おちびりショーツを見られちゃうなんて……！」

「あー、でも、私も恥ずかしいところ見られちゃったし……」

　一応フォローしておく。
　……できているかはわからないけど。

「そういう問題じゃないのっ。もうッ、あたしの恥ずかしいところ見られちゃうなんて……っ」
「あれくらいチビったなら誰だってあるし。……ちょっとビックリしたけどさ」
「……ホント？」
「い、いや……改めて聞かれると、チビッたにしてはほんの少し派手だったというか……全体的に染み渡っていたというか……」
「うう～」

　フォローしたつもりがいつの間にか追い打ちになっている。

　こういうとき、口下手な自分が恨めしく思えてくる。

「こうなったら！　千晴のおちびりショーツ見せてもらうんだから！」
「ちょっ、なぜそうなる!?」

　千晴は素でツッコんでしまう。
　だけどレナの決心は固いようだ。

「明日は学校でおトイレ禁止！　千晴の恥ずかしいおぱんつ見せてもらわないと気が済まないし！」
「トイレ禁止って……っ、それじゃチビるどころか漏らすって！」
「本当に限界だったらあたしが許可するの！　もしも勝手におトイレ行ったら……ここでしてたこと、みんなに言っちゃうんだからねっ」
「そ、それは勘弁して下さい……」

「それじゃあそう言うことで決まりっ。んじゃ、あたしは帰るから！　ばいばい！」
「えっ、うん……ばいばい」

　体操袋を回収したレナは軽く手を振ると、さっさと教室から出ていってしまった。
　あとに残されたのは、千晴たった一人。
　気を失ってしまったとはいえ数分のことだったらしく、まだ身体は熱いままだ。
　それに明日はレナに大変なことを言いつけられてしまった。

「明日はトイレ禁止……。私、どうなっちゃうんだろう……」

　じゅわわっ。

　追い詰められたところを想像して、千冬は意図せずに秘筋を熱く濡らしてしまう。
　もしかしたら自分はマゾなのかもしれない……。
　そんなことを思いながら、千晴は熱い吐息をつくのだった。

ここまで読んでくれて
ありがとうございました！

体験版はここまでです！

次のページからは、
既刊の **CG** を掲載しておきますので
楽しんでもらえたら嬉しいです！

既刊绍介

大決壊シリーズ

各種DLサイト
で配信中！